

校長室だより

第103号

発行日 2017年 3月 7日

発行者 桐光学園小学校長 斎藤滋

【大人と子どもの関わり方】

子どもが大人を信頼できること、そして何かあればいつでも力になってもらえると思える安心感は子どもたちの支えになり、背中を押してくれる大きな力となることでしょう。

今回、右の図のように、大人と子どもの関わりをA, B, Cの3つに分類してみました。

違いは何かと言うと、中央部分にある心を共有できる部分の大きさ（心の広さ）です。それぞれの場合の子どもの気持ちを中心に考察してみます。

Aは、大人との心の共有部分が少ないことから、子どもはちょっとしたことで大人の顔色を気にします。また、許される部分の少なさから「こうあってはいけなかった」という気持ちが正直な心を邪魔し、かつ、怒られたくないという子ども本来の気持ちが加わることで自分の気持ちに嘘を加えてしまうようになってしまいがちです。

BとCは、Aと異なり、仮に同じことをしても落ち着いてそのことに向き合うことができます。また、その余裕が自分で考え、判断する時間を作ってくれます。

A～Cの違いを作るのは子どもではありません。親、教師、そして大人たちがそのようにしてしまいます。自分の子どもは絶対に正しいと考え、ときにそうあるべきと押しつける。その結果が子どもの心を窮屈にしてしまうことがあることを忘れてはいけません。

もう一つ大切なことは子どもとの会話の時間をしっかりと持つことでしょう。お仕事の関係でなかなか時間が作れないこともあるのかもしれません。でも、それを理由に会話の時間がとれないと言っていてはいけないでしょう。ときどき学校にいただく電話の中にも、子どもとしっかりと話し合えばおのずと解決の道が見つかるのではないかと思うことがあります。自分のまわりで起きる様々な困難に子ども自身がしっかりと向き合うことができるようにしてあげることが大切です。成長してほしいのは子ども自身ですから。

【強い気持ちを】

マラソン大会のときに「どうしてマラソン大会をするのですか？」子どもに訊ねられました。どうしてそういうことを聞くの？に対して、「こんなにつらい行事は他にはないから」という返事がありました。つらいこと、大変なこと、苦しいことはできればいいと思う気持ちは分からぬでもありませんが、それ以上にいつからか、大変なこと、苦しいこと、面倒なことを何か悪いことのように考えてしまいがちになっているようになります。快適な生活が当たり前になってきて、暑さや寒さからのがれる方法がどんどん生み出されていました、時間を指定しておけばお風呂も沸いたり、宅配のサービスを利用して買い物に行かなくてもよくなったり、数えればきりがないほど、自分がしなくとも誰かが、または機械がしてくれることが多くなっています。また、私たちは子どもたちの前に立ちはだかる様々な障害や困難を、子どもがそこに行く前に取り除こうとしているのでしょうか。子どもたちが成長していくために必要なことは、目標を持って生活することはもちろんですが、その過程でいくつもの困難を乗り越えるための頑張りや小さな我慢を経験することが、目標を達成することと同じくらい大切なのではないでしょうか。この時代に敢えて不便な生活などを経験しなくてもよいのかもしれません。しかし、苦しいことやつらいことと向き合う力、困難を乗り越えようとする強い気持ちを持てる子どもたちになってほしいと願います。

【見れば分かるでしょ！】

「見れば分かるでしょ！」って言われてしまうような声かけをしてしまうことがあります。たとえば、怪我をした子に対して、「怪我をしたのですか」って言ったとき。遅刻をしてきた子に対して、「遅刻したのですね」って言ったとき。でも、多くの子どもはそんな私の声かけに対して、「はい、校庭で遊んでいるときに転んでしまったのです」とか「ちょっと寝坊してしまったのです」というようにお返事をしてくれます。そのようなお返事ができる子は少し心にゆとりがあって、こちらの問い合わせをその通りには解さずに「怪我をしたのですか、どんなことがあったのでしょうか、何かお役に立てることはありませんか」、「遅刻したんですね。途中で具合が悪くなったのですか」というように理解してくれたのかもしれません。自分に向かって発せられた言葉をどう理解するかは聞く人の心の様子によるのでしょうか。

